



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 1 月 3 日(月)

発行 館長 加藤 智 一

「月白風清」

朝晩の冷え込みが、冬の足音を感じさせる季節となりましたが、まだ 11 月 3 日ですので、晩秋に思いをはせ、夜の静謐な風情を表す四字熟語を今日はご紹介することにしましょう。それは、「月白風清」という言葉です。これは、中国宋代の大文豪・蘇軾（そしやく）が著した散文「後赤壁賦（こうせきへきのふ）」にその出典を持ちます。この作品は、蘇軾が友人たちとともに赤壁（長江沿いの名勝）を訪れた際の体験を綴ったもので、自然の美しさと人生の無常を詠嘆する名文として知られています。「月白風清」はその中の一節「月白く風清し（つきしろく かぜきよし）」に由来し、文字通りには「月が白く輝き、風が清らかに吹くさま」を意味します。ここでの「月白」とは、秋の夜空に浮かぶ白く澄んだ月の光を、「風清」とは、暑さを洗い流すような涼やかな秋風を表しています。この語は単なる自然描写にとどまらず、そこに漂う静寂や清澄な心象風景をも含意します。つまり、「月白風清」とは、自然の美しさとともに、心の澄み渡った境地をも象徴する言葉なのです。

「月白風清」は、主に秋の夜の情景を描写する際に用いられます。たとえば、月見の夜、虫の音が響く縁側でのひととき、あるいは都会の喧騒を離れた山間の宿での静かな夜など、自然と心が調和するような場面にふさわしい表現です。また、この語は禅語としても用いられ、物事にとらわれず、心を澄ませて自然と一体となる境地を表す言葉としても解釈されます。臨済宗の禅僧たちは、「月白風清」の情景に、煩惱を離れた清浄な心のありようを重ね合わせました。文学作品や詩歌においても、「月白風清」はしばしば登場します。たとえば、短歌において、秋の夜の情景を詠む際にこの語を用いることで、読者に静けさや清らかさを直感的に伝えることができます。「月白風清 君を想えば 夜の川 音なく流れ 夢に手を振る」（現代歌人による創作短歌）とか。現代において「月白風清」は、単なる古典的な表現にとどまらず、日常の中で心の静けさや自然との調和を求める姿勢を象徴する言葉としても再評価されています。たとえば、SNS やエッセイ、俳句のタイトルなどに用いられることもあり、現代人の「癒し」や「スローライフ」への憧れを反映しているとも言え

るでしょう。また、精神的な意味合いとして、「月白風清」は執着や煩惱を離れた自由な心、つまり「洒々落々（しゃしゃらくらく）」とした境地を表すともされてます。これは、物質的な豊かさではなく、心の豊かさを重視する東洋的な価値観を体現するものです。

「月白風清」という言葉は、単なる自然描写を超えて、私たちの心のあり方や生き方にまで問いを投げかけてくる奥深い表現です。秋の夜、ふと空を見上げて月の光を浴び、そよぐ風に身を任せるとき、私たちはこの言葉の真の意味を体感することができます。それは、自然の美しさに心を委ね、日常の喧

騒から離れて、静かに自分自身と向き合う時間でもあります。そんなひとときを「月白風清」と呼ぶのです。現代の忙しい生活の中でこそ、この言葉の持つ静謐な力が、私たちの心を癒し、整えてくれるのではないのでしょうか。



←※「月に雁」は「つきにかり」と読み、歌川広重の浮世絵に描かれた美しい情景を指します。この作品は、秋の夜に舞い降りる三羽の雁を描いており、特に満月の下での雁の姿が美しく表現されています。